

「アリス殺し」 小林 泰三 著 東京創元社 2019年4月発行 (創元推理文庫)

夜、眠りに落ちた際にみる夢。時に荒唐無稽で時系列さえもあいまいで、一方で時に現実と疑うほどにリアルなものがある中で、救い（とってしまうと悪夢が前提になってしまいますが）があるとすれば、目が覚めてしまえば夢の世界は消失してしまうということ。しかし、夢の中の残酷な結末が、現実には反映されるとしたら…？

小林 泰三 著：「アリス殺し」はなぜかリンクする「夢」の世界と「現実」の世界を行き来するミステリ作品です。「主人公の大学生・栗栖川亜理が最近繰り返しよく見る『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』の世界観に酷似した夢の中で、玉子のハンプティ・ダンプティが墜落死した後、目覚めた現実で大学に行くと、『玉子』とあだ名される博士研究員が校舎の屋上から転落死を遂げる。同じく現実と夢の世界を共有する人物が次々と判明する中、夢の中では殺人（獣？）事件が続き、アリスにその嫌疑がかけられ、このままでは夢の中で斬首されてしまい、現実でも死を迎えてしまう。また現実でもそれに符合するかのような不審死が連続し、亜理に捜査の手が迫る。果たして亜理は夢・現実で並行する事件を解決し、無実を証明することができるのか？」といったところが粗筋となります。

作品中の夢の世界の土台となっている「アリス」の世界観は、ディズニーによる、アニメ化されたキャッチーな金髪碧眼のアリス像でマスクされてしまっていますが、原作や、アニメ作品本編を鑑賞すると、実際には非現実的な造語と風刺、そしてナンセンスで狂気さえ感じる言葉のやりとりが繰り返される理不尽なものであることが分かります。実際にこの作品中でもその世界観を踏襲し、夢である「不思議の国」の中では、揚げ足取りや循環理論、トートロジーを用いた会話がなされていて、論理的に話題を進めるということは難しくなってしまいます。そこで犯人は二つの世界での死が関連していることを悪用し、夢の世界での代理体を殺すことで夢の世界では論理的な追及を受けずに、そして現実では物証を残すことなく殺人を成し遂げてゆきます。このメタ構造の中でいったい誰がこの連続殺人を行っているか、通常の論理が通用しない夢の世界でこの殺人をどう立証すればいいのか、というのが作品のテーマとなっています。是非この世界構造の中でのミステリを楽しんでいただければと思います。本作以降、＜メルヘン殺し＞シリーズが続刊していて、気に入られた方はそちらも手に取ってみるとよいでしょう。

また、現実世界の誰が夢の世界の誰に相当するのかという点について、この作品の中ではいわゆる叙述トリックが採用されています。時に相手に合わせて主人公自身も自身の正体を伏せるような場面もあります。幾重にもわたる偽証・ミスリード・誤解の中で、登場人物によって明らかにされる前に、皆さんは真相に至ることができるでしょうか。加えて、叙述トリックものの醍醐味として、真相を知った後の再読が挙げられます。作者がどれくらい気を使って場面を描写しているのかを振り返って楽しむのもメタ的でアリでしょう。

最後に、夢の話の冒頭にしましたが、皆さんもよく見る夢、というのはあるでしょうか。かく言う僕はなぜか「全ての歯が砕けて粉になる夢」というのを定期的に見ます。砂を噛むような感覚と、更に噛んだそばから歯自体が粉々になり、その粉が口一杯に広がる感覚の残るリアルな夢で、大変目覚めが悪いです。そこでこれは現実にはリンクしないでもらいたいなど日々歯磨きを欠かさないようにしています。皆さんも、本作品を一読し、読後に周囲を一度見まわした時、果たしてここが現実なのか自問してみたいでしょうか。